

# 人格の対人的診断法の研究 (4)

—— 人格の対人的変数について ——

戸 莉 正 人

(教育心理学研究室)

(平成2年10月11日受理)

## I 人格の変数について

Leary, et al. の人格 (パーソナリティ) の対人的診断法の第一の特色は, Sullivan, H. S. の対人関係理論にもとづき, 人格の対人的次元に注目した点にある。先報では, 対人的診断法によって立つ人格理論としての, 人格の対人関係理論の考察と, その補完の試みを報告した。<sup>(13)</sup>

Leary, et al. の診断法の第二の特色は, その multilevel アプローチにある。すなわち, Sullivan にならい, 対人行動に“深さ”を考慮し, それを《レベル》の概念によって表わし, 人格を, 《個人の表わす対人反応 (あらわな, 意識的な, プライベートな) の multilevel パターン》として捉える点にある。筆者の第三報においては, この multilevel アプローチによる, 人格のレベルの分類と, 筆者の改訂について報告した。<sup>(14)</sup>

Leary, et al. の診断法の第三の特色は, その徹底した経験的アプローチにある。この特色は, 人格のレベルの決定にも, 人格の変数の分類にも認められる。

人格の各レベルにおける対人行動の測定に, いくつの変数を用いるべきか。また, それらの相互の関係は, 如何にあるべきか。これは, すべての人格理論家の直面する形式的問題である。ところで, 人格の基本的データは, 人の行動そのものではなく, その人の対人行動を記述する《プロトコール言語》である。<sup>(7, P. 63)</sup> そうとすれば, 変数の数の問題は, 対人行動を分類する《ことば》(概念的単位)を, いくつかにすべきか, という問いになる。

多くの人格理論では, 変数の数は, 余りにも少ない。Freud, S. の《リビドー》, Adler, A. の《権力欲》, Rogers, C. R. の《成長衝動》などは, 最小の一分法的分類の例である。Freud の《エロス-タナトス》, Kretschmer, E. の《分裂質-躁うつ質》, Jung, C. G. の《内向性-外向性》などは, 二分法的分類の例である。Eysenck, H. J. の《外向-内向, 神経症傾向, 精神病傾向》, Rosenzweig, S. の《他責的, 自責的, 無責的》なども, 三分法的分類にとどまる。

これらは, 変数の数が余りにも少ない。また, 諸変数が相互に関連づけられてはいない。従来の類型論, 特性論のいずれも, 類型や特性の分類基準が一定ではない。しかもその多くは, 先験的分类にもとづくもので, 経験的研究にもとづく変数の分類は少ない。対人行動の測定には, もっと多数の, 一般的 (総称的) ではない, 特殊な変数が必要である。また, それぞれ

の変数が、相互に組織的に関連づけられていることが望ましい。

## II 対人行動の分類

### 1 16の対人的変数の分類

Leary, et al. (Kaiser 財団病院心理学研究プロジェクト) は、人格の対人的変数の決定に当り、次のような作業原理を設定している。

〈作業原理Ⅲ-①〉： 対人行動の測定は、単純で、特殊的な諸変数の広汎な蒐集を必要とする。

〈Ⅲ-②〉： 諸変数は、相互に組織的に関連していること。

〈Ⅲ-③〉： 適応的な反応にも、不適応的な反応にも適用可能であること。(7, P.39)

〈作業原理Ⅶ〉： 人格のすべてのレベルにおける対人行動の測定に、同一の変数体系を用いること。(7, P.43)

〈作業原理Ⅷ〉： 対人行動の測定は、公共的で、検証可能な操作でなければならない；諸変数は、操作的に定義可能でなければならない。(7, P.45)

これらの作業原理にもとづき、男女の神経症者、心身症者、正常者の対人的相互作用の経験的研究（実際の相互作用の観察記録、自己や他者についての言語的記述、夢や空想の記録などの研究）から、対人行動を記述する数百のタームを得た。これらを分類整理した結果、16の一般的な対人的動機のリストを得た。(7, Pp.62-64) 数百に余る、もとのタームは、16の基本的な対人的テーマの、分化したバラエティとみられる。このようにして、単純で、特殊的な諸変数の広汎な蒐集という目的を達している。(7, P.64)

変数の数をもっと多くすれば、隣接する諸変数相互の区別が困難になる。もっと少なくすれば、例えば4変数では、それぞれの対人的意図の重要なニュアンスが失われてしまう。(7, P.64)

（そこで、変数の数の決定は、理論的必要性と経験的実用性の二つの観点から行われていることになる。現在のところ、対人行動の経験的測定のためには、16種の変数（カテゴリー）に分類するのが、実際に便利であるというのである—筆者補筆）。

なお、16の対人的変数の決定は、Erikson, E. H. に負うところが多いという。(7, P.11) 彼は、ライフサイクルの8段階で直面する心理・社会的危機として、8種の中核的葛藤を挙げている。それらは、基本的信頼—不信、自律性—恥、疑惑、自主性—罪悪感、勤勉性—劣等感、同一性—同一性混乱、親密性—孤立、生殖性—停滞、自我の統合—絶望の8種の葛藤である。これは、16種の対人的解決のリストを提出したものと解される。Leary, et al. の対人的変数の分類 (Fig. 1) と対照してみると興味深い。

### 2 対人的変数の二次元的表現

#### ① 諸変数の組織的関連

第二の問題は、人格の諸変数相互間の組織的関連の問題である。この作業原理は、諸変数が一つの連続体として、相互の関係が明らかになるように、秩序づけられることを要求する。このような諸変数の関係を明らかにするには、二次元の円形連続体による表現が最適であ

る。(7, P. 64) 16の一般的な対人的テーマ(動機)を Fig. 1に示す。

ただし, Leary, et al. の変数の円形連続体には, 変数の名称は記されていない。(7, P. 65) そこで, レベルⅢ用の変数名(7, Pp. 170-171)を利用して, 筆者が作成したのが, Fig. 1である。それぞれの変数には, A~Pまで, 時計と反対廻りにアルファベットのコード文字がつけられている。円の外輪には, オクタンツ毎に対人的診断用の診断用語がつけられている。先の用語が穏やかな程度を, 後の用語が極端な程度を示す。

この16の対人的動機のリストをみれば, すべて, 力または親和の因子に関連している。力-弱さ(支配-服従)を垂直軸にとり, 愛-敵意(親和-敵対)を水平軸にとれば, 他のすべての変数は, この4つの結節点のブレンドとして表現される。例えば, 養護の行動は, 強さと愛のブレンドとして, 不信の行動は, 敵意と弱さのブレンドとして理解される。(7, P. 64) また, この16の対人的変数の円形連続体は, 相互の間の関係を表わしている。諸変数の選択と配列は, 一つの対人的行動を, 他の15の変数との関係が明らかな形で, 評定できるように工夫されている。ある行動をCと評定すれば, それを他の変数との関係で定義したことになる。CはBとDから1ユニット離れている。Kからは8ユニット離れていることになる。距離は相互の関係の程度を示す。このようにして, 諸変数の組織的な関連性の要求に対応している。

なお, 16の対人的変数の円形配列の妥当性の検討によれば, 経験的事実と十分に対応することが証明されている。LaForge & Suczekによれば, スケール上の各単位は, 完全には等距離にはないが, 配列は正確な順序にあるという。(6) 筆者(1977)の結果でも, この点は確認されている。(12)

## ② 強度の次元

変数の分類と組織的な配列だけでは十分ではない。それは, <どんな行動をくするか>, <しないか>の有無を示すのみで, <どれだけ>, <どの程度か>という, 強さの区別を欠いている。強さの次元は, 言語的にも, 数量的にも表現可能である。強さの尺度の段階は, 目的により異なるが, 殆どの対人反応について, 3~4段階の評定で十分である。一応, 現段階では, 4段階尺度による表現が便利であるという。(7, P. 66)

16の変数に, 強さの尺度を設ければ, より一そう分化した, 詳細な円形連続体が得られると

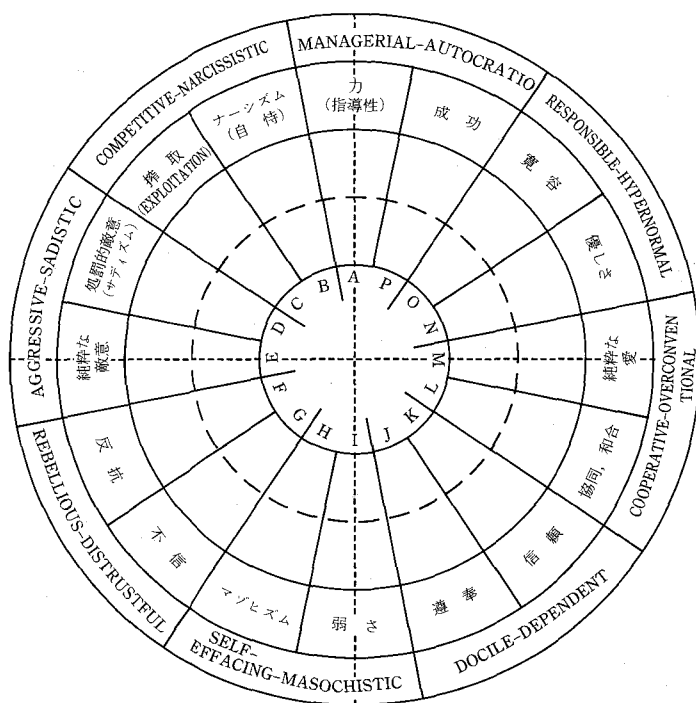


Fig. 1 16の基本的変数による対人的行動の分類(戸莉 1957)

いうが、(7, P. 66) Leary, et al. の変数の円形連続体では、実際には、穏やかな程度と強烈、極端な程度の2段階しか用いられていない。(7, P. 65)

### 3 変数の二次元的表現の利点

対人的変数の、二次元の円形連続体としての配列は、対人行動のどれをも、他の15の変数との関係が明白な形で、評定可能にするのみではない。対人行動を要約するための多くの可能性をもっている。

#### ① 行動要約の方法Ⅰ：《ダイアグラム》

対人行動を要約する最も簡単な方法は、評定、判断、単位を、直接、円内にプロットすれば、グラフによる要約が得られる。(7, P. 67) 各変数毎の評定の合計点を、グラフに記入すればよい。

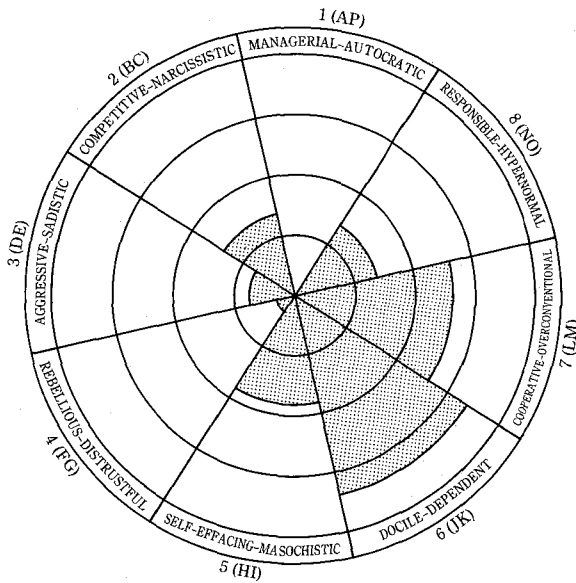


Fig. 2 円形格子 (Leary 1957)

多数の見本集団について、標準的データが得られれば、各人の得点を、所属集団の平均のタームで処理する統計的技法が、使用可能になる。それによれば、各人の対人行動を要約する一点、《要約点》を、円の中心からの距離と方向によって決定できる。円の中心は、母集団の対人行動の平均、すなわち中心化傾向と見なされる。(7, P. 68)

《要約点》の決定法： この要約点を決定する一つの方法は、次の通りである。この円を、ユークリッド空間における二次元の配列と考えれば、三角法の公式により、16の変数を数量的に関係づけることが可能になる。

この円は、二次元空間における8つのベクトル (vector) または点をもつ (力の場—筆者補筆) とみなすことができる。二次元空間におけるベクトルは、任意に選択された二つの方向の量として、数量的に表現できる。この場合、関係方向 (垂直軸と水平軸) として、オクタント AP と LM を用い、ベクトルの二つの成分を、それぞれ Dom, Lov と名づける。Dom は垂直方向の値、Lov は水平方向の値を意味する。ベクトルの二つの成分の計算には、オクタ

Fig. 2 は、その一例である。

ここでは、16の変数を、隣接するもの同志を合わせて、8つのオクタント (八分円) にまとめてある。8つの放射状線に目盛りをつければ、それぞれの変数毎の反応量を示す位置を決定できる。

Fig. 2 は、20時間の治療中の患者の対人行動のグラフによる要約を示す。この患者は、セラピストに対して、従順な、協力的な依存を示し、敵意や競争心の表現を避けていることがわかる。他の患者か、または、この患者のその後の時間内の行動にもとづくグラフを作れば、二人の患者の比較や、治療の初期と後期の客観的比較が可能になる。

#### ② 行動要約の方法Ⅱ：normative アプローチ：《要約点》

ント得点を使用し、 $\sin 45^\circ$ の値を0.7とすれば、以下の公式が得られる。

$$\text{Dom} = \text{AP} - \text{HI} + .7 (\text{NO} + \text{BC} - \text{FG} - \text{JK}).$$

$$\text{Lov} = \text{LM} - \text{DE} + .7 (\text{NO} - \text{BC} - \text{FG} + \text{JK}).$$

但し、AP = オクタント AP の得点、以下同様。

こうすれば、16の変数の得点のパターンを、二つの数字の指標に変換し、これを標準得点に換算すれば、各人の対人行動のすべてを円形《診断格子》内の一点として、位置づけることができる。こうして、円形ダイアグラムは、数値による要約になる。(7. Pp. 68-69)

Fig. 3 の円内の①、②

は、心理療法における、一人の患者の最初の20時間と、その後の20時間における対人行動の要約を示す。《要約点》は、垂直と水平の値の交点により位置づけられている。

### ③ 《要約点》の効用

対人行動の《要約点》を用いれば、一人の人について、三種の異なるタイプの組織的研究ができる。(7. P. 75)

a) 《構造的変異》の測定：一人の人のすべてのレベルにわたる測定結果(要約点)を、一つの円形診断格子にプロットすれば、その時点での人格の《構造》の組織的パターンを診断できる。

b) 《時間的変異》の測定：時を異にする測定の要約を附加すれば、人格の多層的パターンの《時間的》変異の図柄が得られる。

c) 《場面的変異》の測定：対人場面(相手、事態)を異にする場合の行動パターンの変化を図示すれば、《場面的》変異のパターンが得られる。

異なるレベルと、異なる時と、異なる事態における行動の測定が、人格の基本的パターンと変化するプロセスの双方を明らかにする、というのである。

### ④ 原法の評価

以上は、multilevelアプローチと、諸変数の組織的関連の作業原理、全レベルの測定に同一変数を用いるという作業原理、さらに、対人行動測定の徹底した経験的アプローチ等による成果である。

例えば、対人行動を円内の一点に要約する方法は、卓抜な発想として評価されるが、それには諸変数の円形連続体による配列なくしては、不可能である。組織的、包括的でありながら、

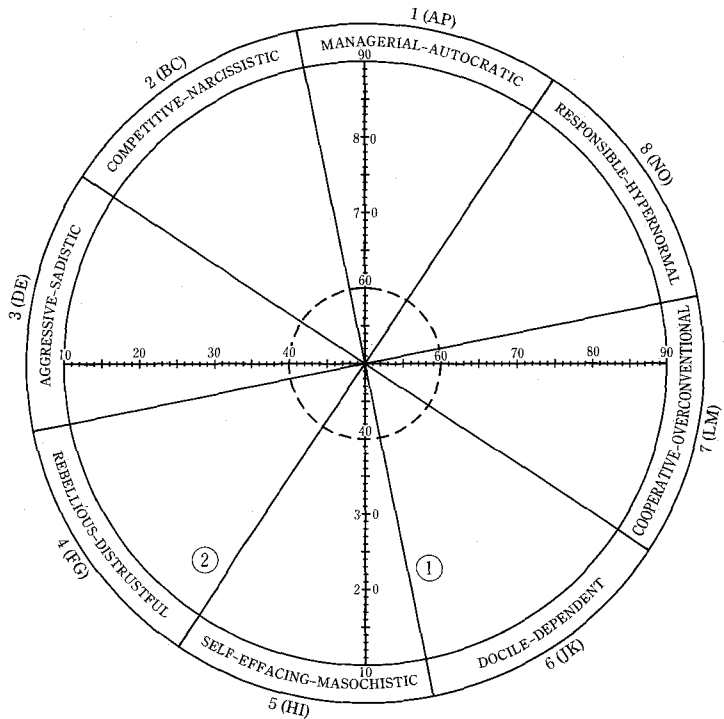


Fig. 3 診断格子 (Leary 1957)

緻密で内的整合性をもつ診断体系として評価できる。しかし、いまだ未完成の体系であり、いくつかの問題点を残している。

### Ⅲ 人格の変数（筆者の改訂）

#### 1 円形格子と診断格子について

##### ① 変数の名称の改訂

対人的変数の16種の分類については、筆者も原法に拠るが、変数の名称については1977年に Fig. 1 の16の変数中、11の変数について名称を変更した。<sup>(12)</sup> ナーシズム、サディズム、マゾヒズムのような、明らかにネガティブな、異常人格の特性を思わせる名称は、Fig. 4 のように、ニュートラルな表現に改めた。

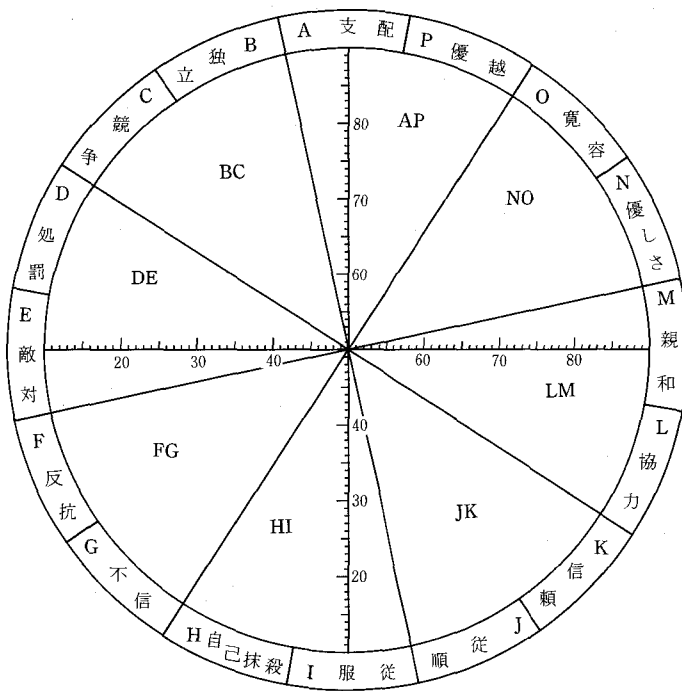


Fig. 4 対人的変数（戸莉 1977）

筆者の対人的診断法改訂の目的そのものからして、最初から異常性の測定と誤解されやすい名称は、好ましくないからである。それでも残ったHの〈自己抹殺〉についても、1981年の改訂版からは、〈謙虚〉に改めた。それは、どんな変数にも、ネガティブな側面のみならず、ポジティブな側面があることによる。特に、普通人の自己理解と他者理解に用いるために、変数のポジティブな側面を考慮した結果である。

なお、Fig. 4 の変数の名称は、Leary, et al. のレベルⅢ用の変数のリストから、その内容を意識して、〈動機〉の名称から〈行為〉の名称に

改めて、筆者が表記したものである。

また、この16の変数の円形連続体は、筆者の因子分析による検討によれば、《強さ》、《弱さ》、《親和または愛》、《疎隔》の4因子の組み合わせから成ることが見出されている。<sup>(12)</sup>

##### ② オクタントの傾斜の訂正

次に、対人行動要約の二つの方法として、オクタント得点と要約点を利用し、それぞれを、《円形格子》と《診断格子》に記入する方法も原法に拠る。ただし、以下の点については、改訂した。

Leary, et al. は、16の対人的変数の円形連続体による二次元的表現においては、16の変数

毎の扱いをしている (Fig. 1) のに、実際の対人行動の測定結果の要約においては、《オクタント得点》を利用している (Fig. 2)。それにも拘わらず、《円形格子》(グラフ) への表示においては、16の変数の場合と同じ傾斜の円形連続体を用いているのは問題がある。16の変数の二次元的表現においては、A-I, M-E を垂直軸、水平軸にしているので支障はないが、隣接する二変数ずつを合わせてオクタントにまとめた場合は、オクタント AP-HI, LM-DE の正中線が、それぞれ垂直軸と水平軸になるはずである。ところが、この修正がないために、それぞれのオクタントが時計廻り(右廻り)に、 $22.5^\circ$  傾斜したままになっている。これは不可解の一語につきる。

さらに、《診断格子》も同様に、すべてのオクタントが時計廻りに $22.5^\circ$  傾斜したままである。これでは、ベクトルの計算による《要約点》のプロットのさいに支障(ズレ)が生じる。すべての《要約点》(力の作用点)の位置が、 $22.5^\circ$  ずれることになる。これは、明らかに不合理である。

そこで筆者は、オクタントの傾斜を修正した。すべてのオクタントを時計と反対廻り(左廻り)に $22.5^\circ$  回転させ、オクタント AP-HI, LM-DE の正中線が文字通り“垂直”と“水平”になるよう修正した (Fig. 5, 6)。1981年より、この改訂版を使用している。

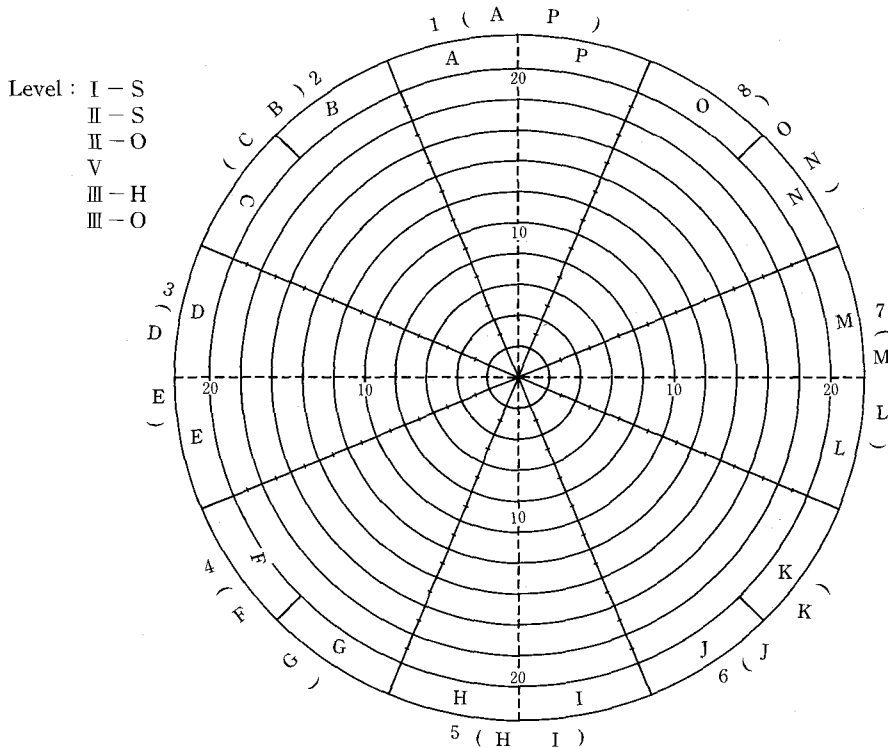


Fig. 5 グラフ(戸莉 1981)

### ③ 《円形格子》の名称変更

Leary, et al. の原法では、オクタント得点記入用の円図形を、“円形格子”または“ダイアグラム”と呼び、ベクトルの計算による《要約点》記入用の円図形を、円形“診断格子”と呼

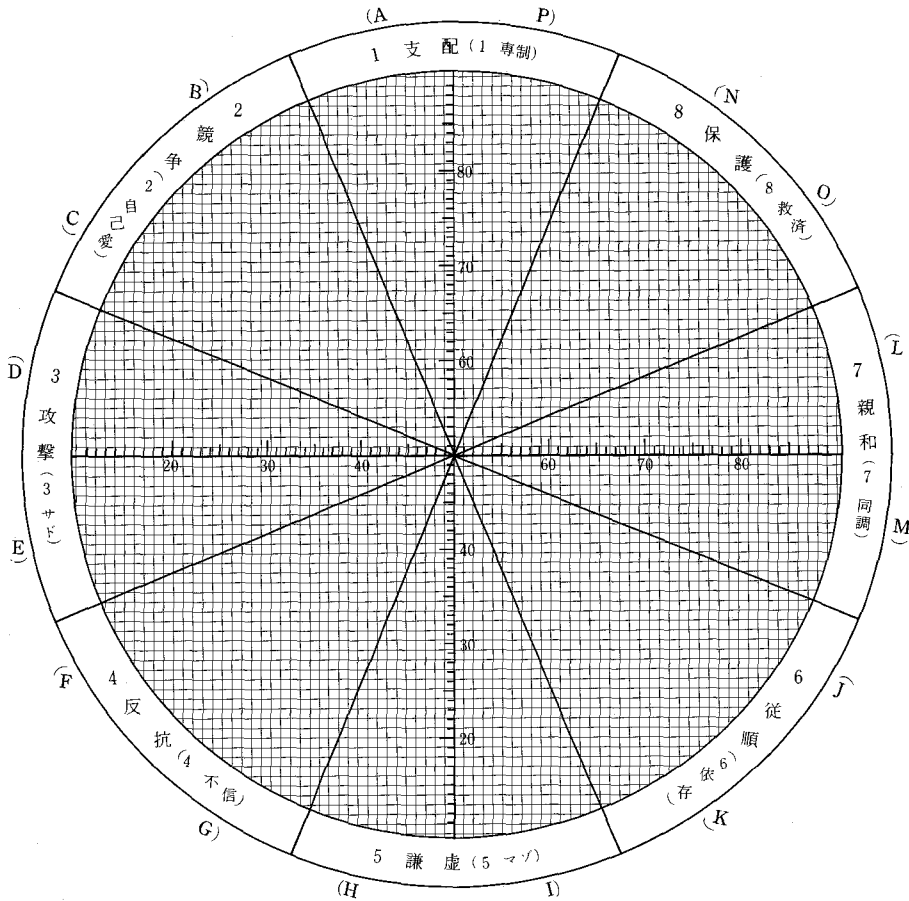


Fig. 6 診断図 (戸莉 1981)

んでいるが、筆者は、前者を《グラフ》、後者を《診断図》と改称した。その方が判りやすいからである。

## 2 規範的 (normative) アプローチの問題点

Leary, et al. のベクトルの計算による対人行動要約の方法は、確かに効果的な方法である。16コの得点、または8コのオクタント得点は、円内の一点に集約されるからである。ただし、《要約点》の決定に当っては、Dom (垂直軸の値)、Lov (水平軸の値)の粗点は、集団の平均を基準にした標準得点に換算してプロットすることになっている。この場合、円の中心は見本集団の平均に当る。ところで、集団の平均を基準にして各人の相対的位置を決定するという、いわゆる規範的アプローチ (偏差値はその一例) には、かねてより筆者は疑問を抱いてきた。

a) その第一は、平均への疑問である。平均とは、本来、実在しない仮空の存在である。それは、各個人の独自性、個性を捨象して、初めて成立する値である。このような平均値にもとづいた、“平均人”の心理学には、筆者は、かねてよりあきたらなかった。第二は、集団の平



均との比較で人を見ることへの疑問である。それでは、各個人の特徴は、他者との比較でしか捉えられないことになる。しかし、一人の個人は、比較を絶する絶対的存在である。Leary, et al. の対人的診断法の卓抜さに魅せられ、多年にわたり、追試と検討を重ねながらも、なお強い抵抗を感じていたのは、この集団の平均との比較で個人を見るというアプローチの不合理性である。

b) 以上のような原理的な問題のみではない。実際的にも不合理を生じやすい。例えば、Dom, Lov の得点範囲は、筆者の「ICL 評定票, 改訂第5版」(1981) によれば、理論的には、+48.0~-48.0にわたることが可能である。すなわち、各人の粗点は  $\langle 0 \rangle$  を中心にして、正負両方向に分布している。この場合、円の中心を集団の平均とすると、支障が生じてくる。集団の平均は、必ずしも  $\langle 0 \rangle$  になるとはかぎらないからである。

ある個人の Dom, Lov (垂直, 水平の指標) の粗点が、仮に正の値であっても、集団の平均値が、それよりも高ければ、座標の上では、円の中心よりは  $\langle 下 \rangle$  (負の領域に) プロットされることになる。逆に、粗点が負の値であっても、集団の平均値が、それよりも低ければ、円の中心よりは  $\langle 上 \rangle$  (正の領域に) プロットされることになる。これは、明らかに不合理である。《グラフ》との不一致も生じる。それならば、むしろ Dom, Lov の粗点を、そのまま《診断図》にプロットした方がベターであろう。ただし、粗点の範囲を考慮すれば、垂直、水平両方向の尺度は長大になり、診断図の直径も長大になり、実用的でなくなる。

そうとすれば、何らかの換算法が必要になる。それは、集団の平均を基準にした相対比較であってはならない。集団の平均を基準にしないとすれば、それに代わるものは何か？

相対比較を超えて、個人自身を基準とした“絶対比較”。規範的 (normative) アプローチを去って、個性記述的 (idiographic) アプローチに徹すること。果して、それは可能か？常識を破った発想、発想の転換が必要であった。その解答は、一朝一夕には得られなかった。暗中模索の日々が続いた。長い闇であった。そして、ある日忽然としてひらめいた。それは  $\langle 0 \rangle$  である。 $\langle 0 \rangle$  は、正負いずれでもなく、しかも正負の起点である。集団の平均ではなく、粗点の  $\langle 0 \rangle$  を中心とした尺度構成をすればよい。Dom, Lov の粗点の  $\langle 0 \rangle$  を“標準得点”の50とする尺度、いわば“絶対尺度”である。正に、 $\langle 0 \rangle$  からの出発であった。こうして、1988年、 $\langle 0 \rangle$  を中心においた換算表を作成した。筆者の診断図では、円の中心は粗点の  $\langle 0 \rangle$  に相当する (Fig. 6)。ただし、普通の標準得点とは異なるので、単に  $\langle S. S. \rangle$  と表示している。

この結果、人格のすべてのレベルにおける対人行動の測定に、同一変数を用いるのみではなく、すべてのレベルに同一換算法を用いることが可能になり、診断図へのプロットが簡便になった。詳細は、次報にゆずる。

### 3 その他の改訂

#### ① ベクトルの計算式の改訂

ベクトルの計算による対人行動要約の方法は、Leary, et al. の原法に拠るが、彼等の計算式には、一部分、判りにくい点がある。Dom の計算式は理解しやすいが、Lov の計算式 ( $Lov = LM - DE + .7 (NO - BC - FG + JK)$ ) は、一見しただけでは、その原理が判りにくい。そこで、筆者は次のように改訂した。  $Lov = LM - DE + .7 (NO + JK - BC - FG)$ 。この方が、ベクトルの計算式としては、その原理が判りやすくなる。

## ② 《要約点》の効能について

原法では、ベクトルの計算による《要約点》の効能として、患者個人についての、人格の構造的変異、時間的変異、場面的変異の3種の組織的研究の効能を挙げるにとどまり、集団の研究と理解については、考慮していない。それは、本来、臨床的目的から、〈個人の診断〉にかざられていることによる限界であろう。

しかし、筆者の対人的診断法改訂の目的は、せまい臨床目的を超えて、広く普通人の人格の研究と理解とに活用することにある。そこで、個人の研究と理解のためのみか、集団の研究と理解にも有効であることを指摘しておきたい。

a) 集団の構造の解明： 一人の個人についてのみならず、一つの集団内の各メンバーの結果を、同一診断図内にプロットすれば、一つの集団のメンバー間の差異を明らかにすることができる。これは、集団の構造の理解にとって有効である。

b) 集団の比較： また、上の結果から、一つの集団のメンバー全員の《重心(力の合成点)》を決定すれば、複数の集団(学級、家族、仲間集団、職場集団)間の異同を明らかにすることも可能である。

c) データ間、レベル間の関係の診断： 自己と他者(父母、同胞、友人、恋人、配偶者、同僚、上司など)についての評定結果を、一つの診断図の中にプロットすれば、同一視、異質視、同等視、理想視、前意識的同一視など、データ間、レベル間の関係から、多様な診断が可能になる。(この点は、原法では、人格の《変異性》の診断に含まれている)。診断法の詳細については、次報にゆずる。

## IV 対人的変数の問題点について

## 1 自己自身とのかかわりの問題

Sullivan, H. S. および Leary, et al. においては、《自己世界》が欠落しており、したがって《自己自身》との関係が考慮されていないことは、先報で見た。<sup>(13)</sup> 自己世界の欠落は、存在としての自己の次元の考慮の欠如を意味する。

谷口によれば、自己自身に対する真のかかわり方とは、《存在としての自己》を真に実現できるように、自己自身に対して配慮することである。内容的に言えば、存在としての自己を受容することである。<sup>(10, P. 53)</sup> ところで、存在するということの基本的特性は、それが存在しなくなるということにある。そうとすれば、自己自身への真のかかわり方ということとは、やがて、存在しなくなる存在としての自己を受容することにほかならない。<sup>(10, Pp. 53-54)</sup> すなわち、存在としての自己の受容とは、かけがえのない、しかも一回限りの実存としての真の自己の受容と、自己の実現を意味するものと解される。

このような自己自身へのかかわり方は、Maslow, A. H. のいう《自己実現》<sup>(8)</sup> や、Fromm, E. のいう《生産的構え》にはほかならないのではないか。Fromm のいう《生産的構え》とは、自己の力を用い、自分にそなわる可能性を実現するという、人間の能力のことである。<sup>(3, P. 109)</sup> 愛と理性は、生産性の異なる表現である。<sup>(3, P. 124)</sup> 生産的愛とは、他人と自己への生産的な関係であり、それは、責任と注意と尊敬と知識を含む。<sup>(3, P. 137)</sup> 理性(生産的思考)とは、現象の表面をつき破り、その本質を理解する能力である。<sup>(3, P. 113)</sup>

## 2 自己からの逃避の問題

しかし、刻々と存在しなくなりつつある自己の存在を受容することには、人は本能的な恐れを感じ、存在としての自己からの逃避があらわれてくる。ものをむさぼり、所有によって身の安全をはかるうとしたり、自分の利害だけを基準にして他人と関係しようとしたり、世間や群へ埋没したり、目前の社会への適応のみを人生の目標としたりするの、存在としての自己自身から逃避しようとする人間の姿にほかならない。そこには、真の自己が覆われている、と谷口は指摘する。(10, Pp. 54-55)

すなわち、人の自己自身に対する真のかかわりが姿を消し、そのかかわり方に変様が生じる時、ものや他人に対するかかわり方にも変様が生じる。共生的関係、退行的関係、利害関係のような、人間関係における原理的な変様は、《存在としての自己》が覆いかくされている時

Table 1 構えの一覧 (Fromm1947, 1964より)

同化の構え	社会化の構え
I 非生産的構え	
a. 受容的……………マゾヒズム的	} 共生的関係
b. 搾取的……………サディズム的	
c. 貯蔵的	} 退行
d. 市場的	
e. 愛死的	
II 生産的構え	
生産的活動……………愛, 理性	

の関係の変様にはほかならない。そこに依存や孤立、利用という関係の仕方があらわれ、支配とか服従、破壊とか不信、また人間のもの化というような現象が生じる、というのである。(10, P. 55)

そうとすれば、Leary, et al. の分類した対人的変数の大部分は、まさに《存在としての自己》からの逃避の結果として生じる、人間関係の変様の諸相をとらえていることになる。これらは、Fromm のいう《非生産的構え》(Table 1) に相当する。(3, Pp. 85-107)

(Fromm は、はじめ、同化の構えの非生産的構えとして4種、社会化の構えの非生産的構えとして4種を挙げていたが、<sup>(3)</sup> 1964年の著作<sup>(4)</sup> においては、新たにネクロフィリア、ナルチンズム、近親相姦の固着の3種をあげている。1966年のEvansとの対話<sup>(2)</sup> においては、《ネクロフィリックな(愛死的)構え》を、第5の非生産的構えとして追加しているので、Table 1には、それを追加した。ただし、1964年の著作では、ネクロフィリアを〈社会化〉の様式としているが、1966年の対話では、〈同化〉の様式としているので、後者にしたがった。また、Fromm のいう〈理性〉は、社会化の構えというよりは、むしろ同化の構えに属すると思われる。

なお、Fromm の晩年の著作「To have or to be ?」<sup>(5)</sup> では、〈持つ〉様式と〈ある〉様式について論じた後、新しい社会と新しい人間の可能性を追求している。その新しい人間像としてあげられている特徴は、まさに、生産的構えの人間像そのものである。人格の非生産的構えと生産的構えの差異は、ここでは、〈持つ〉様式と〈ある〉様式の差異として提示されていると解される。

## 3 非人格的關係の問題

Sullivan と Leary, et al. においては、《自己世界》が欠落しているために、彼らのいう《対人関係》には、“われとなんじ”の全人格的關係が、十分には考慮されていない。<sup>(13)</sup> その結果は、医師と患者の關係の如き不平等な役割關係か、日常的な利害關係や“われとそれ”の非人格的關係にとどまることになる。

しかし、Fromm のいう《生産的構え》は、一つの理想状態ではあるが、いまだ、どんな社

会においても、例外的にしか達成されてはいない理想である。<sup>(9, P.84)</sup> Fromm によれば、精神的健康は社会との関連において規定される。<sup>(9, P.84)</sup> 正気の、健康な社会は、生産的構えや自己実現を促進するが、病める社会は、病める人びとを産み出すという。<sup>(9, P.69)</sup> 不健康な人びとが多いとしたら、それは社会そのものが病める社会だからである。

Leary, et al. と、それに準拠した筆者の対人的変数の大部分が、日常性に転落した対人関係しかとらえられないとしても、不思議ではない。真に健康な人格の少ない今日では、“健康な”対人的変数は少数にならざるをえない。先験的分類によらず、経験的方法によるかぎり、そうなるのが当然である。しかし、このことは、見方を変えてみれば、真の自己関心を忘れ、ものや金、地位や名声、権力や快樂の追求に走る今日の人間の姿を、如実に反映しているのではないか。

とはいえ、人格の対人的変数を、Fromm のいう《生産的構え》と《非生産的構え》のように、両面から見直すことも必要であろう。

#### 文 献

1. Erikson, E. H. Identity and the life cycle, International Univ. Pr. Inc., N. Y., 1959. (小此木啓吾訳編『自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—』, 誠信書房, 1973, Pp.61-124.)
2. Evans, R. I. Dialogue with Erich Fromm, Harper & Row, N. Y., 1966. (牧康夫訳『フロムとの対話』, みすゞ書房, 1970, P.45.)
3. Fromm, E. Man for himself, Rinehart, N. Y., 1947. (谷口隆之助他訳『人間における自由』, 東京創元社, 1972, 改訳版.)
4. Fromm, E. The heart of man—Its genius for good and evil—, Harper & Row, N. Y., 1964. (鈴木重吉訳『悪について』, 紀伊国屋書店, 1965, Pp.38-49.)
5. Fromm, E. To have or to be?, Harper & Row, 1976. (佐野哲郎訳『生きるということ』, 紀伊国屋書店, 1977, Pp.103-175, 228-230.)
6. LaForge, R. & Suczek, R. F. The interpersonal dimension of personality: III. Interpersonal Check List, J. Pers., 1955, 24, 94-114.
7. Leary, T. (ed) Interpersonal diagnosis of personality, Ronald Pr., N. Y., 1957.
8. Maslow, A. H. Motivation and personality, Harper & Row, 1954. (小口忠彦監訳『人間性の心理学』, 産業能率短大出版部, 1971, 第12章.)
9. Schultz, D. Growth psychology—Models of the healthy personality—, Litton Educational Publishing, Inc., 1977. (上田吉一他訳『健康な人格：人間の可能性と七つのモデル』, 川島書店, 1982.)
10. 谷口隆之助他『人間存在の心理学』, 川島書店, 1967.
11. 戸刈正人 臨床心理学における診断の問題Ⅱ—パースナリティの対人的診断—, 愛媛大学紀要, 第5部, 第4巻, 21-34, 1957.
12. 戸刈正人 対人関係の研究(1)—ICL 性格評定票の作成—, 愛媛大学教育学部紀要, 第1部, 第23巻, 41-56, 1977.
13. 戸刈正人 対人関係の研究(2)—人格の対人的次元について—, 愛媛大学教育学部紀要, 第1部, 第36巻, 1-10, 1990.
14. 戸刈正人 人格の対人的診断法の研究(3)—人格のレベル(多層性)について—, 愛媛大学教育学部紀要, 第1部, 第37巻, 33-45, 1991.